

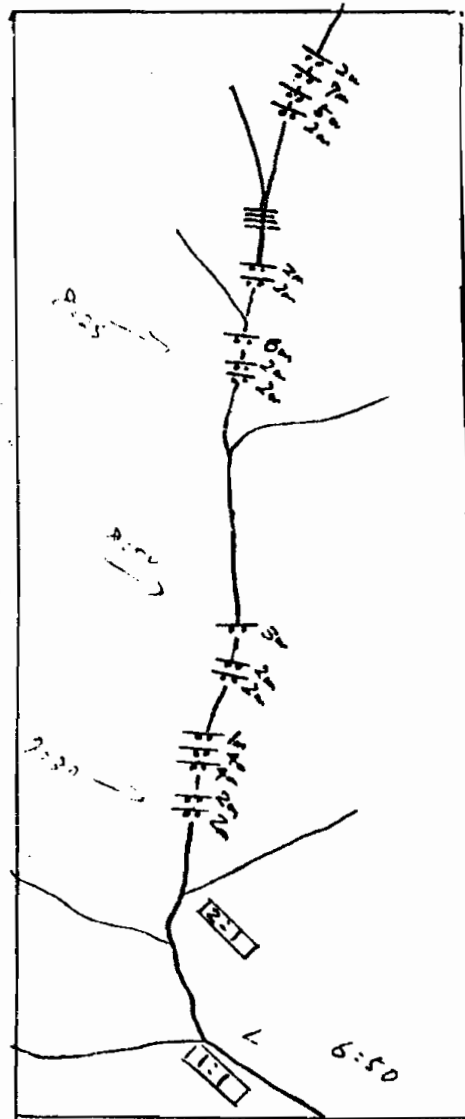
に七入沢出合。沢幅は5 m程で、さほど広くない。釣人のものと思われるアキカンなど、所々に目につく。

出合から40分程歩くと、2～3 mの滝がポツリポツリと出てくるが、すぐまた30分程の河原歩きとなる。

右俣出合を過ぎると、沢の勾配がきつくなってくる。このあたりから適当に滝がかかるようになってきた。いずれの滝も直登して進む。高度はどんどん上がってゆく。最後は滝というか、露岩というか、直登したらあとはヤブとなった。ヤブはさほどでなく、ヤブこぎに苦勞するほどでもない。10分程で登山道に飛び出した。

稜線で和泉、西の両パーティと無線交信。大杉岳で西・福原パーティと合流して、御池めざして登山道を下る。 (記・大西真一)

[タイム] 七入沢出合(6:50)→右俣出合(8:00)
→登山道(9:10)



只見川中流域左岸の沢

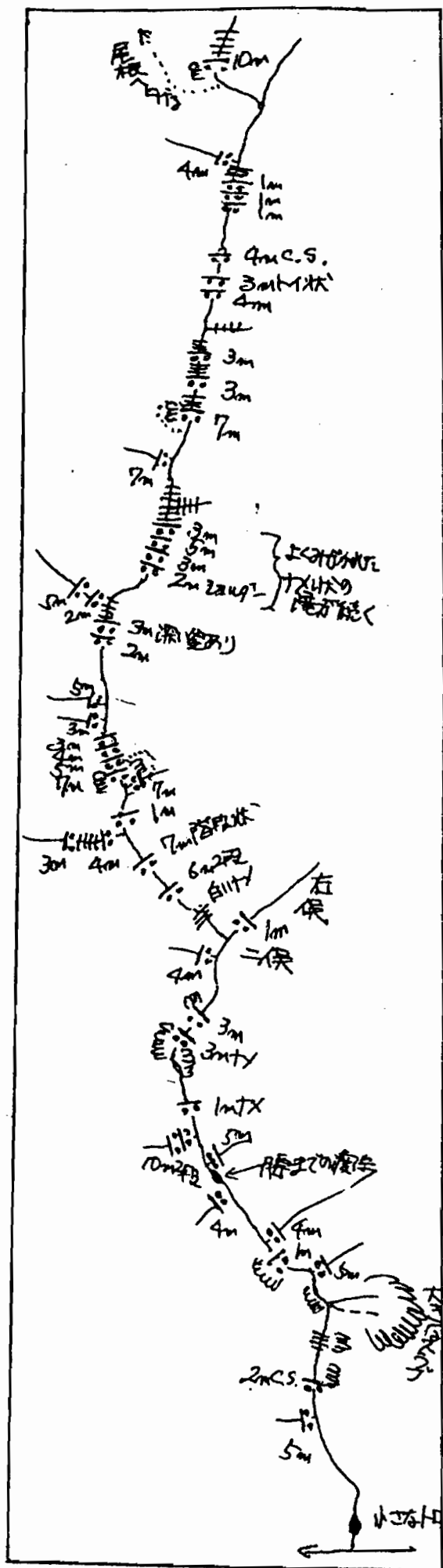
1989年度の沢登り集会は、8月26日に只見川流域にて実施した。あいにくの悪天で、27日の遡行が中止となり、1日だけの行動に終わってしまった。

押倉沢

1989年8月26日

西 和文・和泉 功・鈴木健一郎

7:40遡行開始。押倉沢の水は、とてもきれいである。この前の台風で、沢床の



みずあかが洗い流され、白い岩肌が露出しているため、特にきれいに感ずる。出合の小さなトロを越えると、しばらくは平凡な河原歩きが続く。1mチョック滝を越えると、前面に威圧感をもつ大きなスラブが広がるが、沢の方は平凡なままで、二俣に達してしまった。ここまで約1時間。距離は割合とあるのだが、意外に早く着いてしまった。

二俣で一息いれてから遡行を再開。左俣に入ると、ようやく滝が出てきた。まずは6m2段の滝。細かいがホールドは充分で、直登する。このあと沢が狭くなって、7m階段状の滝。ここも楽に直登する。滝が連続せず、ポツリポツリと出てくるのが、この沢の特徴のようである。

やがて沢の行く手を阻むようにして7mの滝。ここでカモシカに出会った。右岸の岩場を身軽に越えて、すぐに姿を消す。そういえば、ここらあたりの河原にはたくさんの足跡がついていた。さて、この滝はとでも越せない。右岸を偵察してみるが、カモシカのように登れない。左岸を高捲くのがよからうということになって、支沢に取り付く。支沢の7m滝は、いやな草付の登り。私がトップで登り、後続にザイルを出した。結局50mほどの高捲きとなる。いったん沢に戻ると、3~5mの滝が続いている。最初の3mの釜が深く、腰までの渡渉となったが、滝そのものは快適に登れた。

深い釜をもつ小滝を越えると、2~5m

の滝が連続する場所に出る。よく磨かれて滑り台のようになった滝ばかりで、特に3番目の滝が越せない。和泉さんの肩に乗って左岸草付に登り、不安定な草付をトラバースして上に出る。あとはザイルを出してゴボウ抜きに引き上げた。

このあとしばらく河原歩き。そして7m滝が行く手を阻む。ここは登れない。右岸を捲くことにするが、出だしの岩場基部の草付のトラバースがいやらしかった。樹林帯に入れば、あとは安心。灌木を支点にしながら沢に降り立つ。

このあと滝の途中にある甌穴がちょうどよいスタンスになる4mの滝を過ぎると、沢は明るくなる。随分水量が減ったなあと思っていたら、やがて溜沢となる。岩の間から湧き出す水がこの沢の水源。のどをうるおし、ポリタンにつめて出発すると、すぐに二俣。右俣はブッシュがかぶっている。下降を予定している二の平沢に向かうには、左俣の方が便利。

左俣はすぐに10mの滝をかける。よく磨かれた滝で、登れない。右岸の樹林帯に入り込んで捲くつもりであったが、途中から眺めると、沢の上部はずっとスラブが続いている。沢に戻るのも急斜面のトラバースで大変。そのまま尾根に逃げた方が利口と判断して、小尾根をつめあげ、1時間ほどかけて稜線に出る。出た所は、大松沢と二の平沢、押倉沢の3つが集まる小ピークのすぐ東側であった。

(記・西 和文)

[タイム] 押倉沢出合(7:40)→二俣(8:40, 8:50)→左俣終了(11:50)→稜線(12:50)

大松沢左俣

1989年8月26日

L大西真一・小野 学

三条部落のキャンプ地より本名ダムの方へ少し戻り、霧来沢に下降して大松沢の出合に向かう。出合着8時。

大松沢に入るとすぐゴルジュとなり、右に曲がったところに6mの滝がかかる。多分釣人が使うのであろう、左岸にロープがかかっている。利用させてもらって何なく通過。このところは6m滝以外にもいくつかの小滝がかかり連瀑となっているが、ホールドもあり、無事通過する。

ゴルジュ通過に15分を要した後は、河原歩きとなる。だらだらとした河原歩きが続いて飽きてきた頃、二俣手前に2mと4m2段滝が連続してかかる。ここはホールドがなく、左岸の草付を利用して越える。帰路はザイルに頼ることとなっ